

### 3. 寄稿：退職で発見した身近なまちづくり

(株)日建設計総合研究所 特別顧問社外パートナー 上野和彦)

グループ会社を含めて 46 年間勤めた会社を昨年末で退職した。その間、都市計画のプランナー、コンサルタントとして国内外で各種のまちづくりやインフラ計画に参画し、数多くの都市を訪問した。昨今の IT 技術の発展を背景として、まちづくりの分野でもデジタル化は確実かつ急速に進展し、加えてインターネットの普及により、現地に関するかなりのデータや情報は居ながらにして収集できる環境にはなっている。

ただ、これらの技術やツールを業務の効率性や正確性を高める手段として利活用することに異論はないが、これをもって現地訪問自体を省略するということには疑義がある。実際に現地に行くことは情報収集という直接的目的だけでなく、プランナーとしての感性や判断能力を磨くことにも繋がると考えている。そして今般、残念ながら退職により、業務で現地に行くという事は無くなったわけである。

だとすれば、純粋に興味や好奇心に沿った観光やまち歩きを楽しめばよいわけで、今はやりのウォーキングを兼ねることで、心身の健康維持にも効果がありそうである。そこでふと気づいたのだが、業務ではよそのまちを探索していたが、最も身近な自分が住んでいるまちについては意外と知らない、いわゆる紺屋の白袴状態であった。

住んでいるのは多摩地域のある私鉄駅からほど近い場所であり、駅直近には大型商業施設など生活利便施設が立地する一方、その背後には多摩川の自然豊かな河川敷が広がり、通勤していた頃はラッシュに揉まれ、それなりに大変であったが今となっては、自然とまちが近接する典型的郊外型ライフスタイルに満足しているところである。

まち歩きとしては、まずは駅周辺から始めてだんだんに見知らぬエリアに向かうことにした。そこで役立っているのがデジタル化の恩恵である地図アプリであるが、あくまで大まかなポイントと方向だけを決め、後は現場合せで足の向くまま気の向くまま、業務的な義務感からは無縁の解放感を楽しんでいた。

ところが程なくして、そのエリアの都市計画やインフラ施設の事業手法などが気になりはじめ、あくまで簡単に調べられる範囲ではあるが、現地を見てこれらを確認するという現地踏査の様相を帯びてしまい、今一度、初心に帰ったまち歩きに戻そうと反省しているところでもある。なぜこのようなことになったのかは、いわゆる職業病とか習性性の側面もあるが、どうも一種の対抗心もあると思っている。

同じ多摩地域には国内最大級のまちづくりと言える、多摩ニュータウンという都市計画と開発事業の権化のような存在があり、それに比べると、既成市街地である我がまちは歴史的には勝っていても計画性や先進性では負けているはずだから、何でもよいので誇れる部分や独自の魅力と呼べるものを少しでも見つけたいという思いである。

調べてみると案の定、多摩センター地区に比べ都市計画マスタープランでは格下の位置づけだし、都市再生整備計画の対象でもなかった。また、鉄道の高架化下は賑わっているが連続立体交差事業ではないし、バスターミナルや大規模駐車場も整備されているが都市計画施設ではないなど、法制度的位置づけはやや口惜しい感は否めない。

しかしながら、居住者や訪問者にとっては位置づけ論や手法論ではなく、実現された都市がいかに安全で便利か、快適なサービスを楽しんでいるかに尽きると思う。このような立場からいえば、引越しの時も地区外には転出せず、同じ地区内での移動だけで引き続き住み続けているという事実を、今一度、再認識すべきなのであろう。

そして、遂にこのまち歩きでひとつ発見したことがある。それ自体は今さらの話ではあるが、都市とはハードな整備だけではなく、まちおこしと呼ばれるソフトな取組みとの両輪が魅力や愛着を高めるという実感である。そのきっかけは丘陵を開発した住宅地のなかに、ラウンドアバウト（環状交差点）を見つけたことがきっかけである。



ご承知かも知れないが、ラウンドアバウトは欧米やアジアでは一般的な交差点処理方式として定着しているが、日本では2013年に道路交通法改正、翌2014年から運用開始されたものである。それで当該ラウンドアバウトを調べてみると、1962年に住宅地開発の一環で整備され、先の道交法改正を受けて2014年に東京都公安委員会が都内第一号に指定したものであることが判明した。

60年以上も前に整備されたことは興味深いのが、小職のこのような関心とは全く異なる視点でこれを見にくる、女性を主体とする若い人達がいることに気付いた。正体は映画やアニメの舞台となった場所を訪問する、いわゆる聖地巡礼で訪れるファンである。実は、我がまちは日本の有名なアニメ会社が約30年前に公開した青春アニメのモデルになっていたのである。早速、DVDを借りて視聴したのは言うまでもない。

改めて気づいたが、いつ頃か駅での電車接近音が当該アニメの主題歌になっているし、駅前には作品中の重要アイテムであり、先のラウンドアバウトに面して立地する骨とう品店を模したオブジェが、地元商店会などによって建てられている。

このように、自分が住むまちへの愛着と自慢のタネが少し増えたことは、退職して始めたまち歩きの思わぬ副産物であり、今後も新たな発見があるのかも少しワクワクしている今日この頃である。

